京都大学人文科学研究所共同研究 最終報告書

1. 研究課題
毛沢東体制と公安警察に関する歴史的考察
Public Security Forces Under Mao

2. 研究代表者氏名
周　俊
Zhou　Jun

3. 研究期間
2022 年 4 月-2023 年 3 月

4. 研究目的
　これまでの中国現代史研究は、社会の成員一人一人の自己批判と相互批判を通じて社会の安寧を保障するのだという毛沢東体制下の社会運営規範が形成されて浸透したとされている。しかしながら、共産党による一党支配を盤石なものにする上で、社会主義体制での治安維持、犯罪・反党行為の抑止・摘発を行う絶対的な暴力装置・公安警察の役割も非常に重要である。ただし、公安警察については、その機構自体がほとんど表に現れず、その活動記録も公表されないため、中国現代史研究でも全くのエアポケットとなっている。
　これに対して本研究は、申請者がこれまで独自に収集・蓄積してきた史料群ならびに京大人文研の所蔵する「文革期紅衛兵資料」コレクションを活用することで、より正確に、より詳しく、毛沢東時代の公安警察の実態を分析し、この研究史の大きな空白を埋めることができる点を最大の特色とする。この問題は毛沢東体制の特質やそのメカニズムの解明に直結するチャレンジングな、それでいて実現可能な試みである。
This research analyzes how the Chinese government managed social stability in Mao's era. Unlike existing literature that adopted the ideological approach and highlighted the effectiveness of self-criticism and mutual criticism of ordinary citizens, this study unravels the crucial role of public security institutions and their evolution process. Specifically, using archive data collected from the Institute for Research in Humanities, Kyoto University, this research discusses how specifically did public security policies managed social stability via monitoring ordinary citizens and secretly arresting "counter-revolutionaries". It posits that public security organizations serve as organs of violence that helped consolidate CCP rulership by effectively controlling revolutionary social forces and preventing them from growing into influential rebel power. This research shed light on the function of secret state

repression in Mao's era by clarifying the role of public security organizations, a relatively less touched area due to the confidential classification of credible data. It also contributes to a deeper understanding of political control in totalitarian regimes.

5. 研究成果の概要

本研究班は、現代中国における毛沢東時代の公安警察と暴力に関する個別の事例研究を比較・統合し、体系的な理解へと繋げることを目的とした。主な研究成果としては、2022 月 12 月 10 日に、班員全員を含めて総計 15 名の研究者が出席する研究会を開催したことが挙げられる。約 7 時間にわたったこの研究会では、6 つの報告が行われ、史資料の収集・整理・利用といった問題だけでなく、毛沢東時代の公安警察と暴力についての総合的・体系的な理解を促す討議も活発に行われた。

6. 共同研究会に関連した主な公表実績

本共同研究班の研究活動に関連した成果実績としては、令和 5 年 3 月 5 日に東京大学グローバル中国研究拠点と京都大学人文科学研究所現代中国研究センターとが共催して京大人文研で開催した「中共百年史書評会」（公開）があげられる。本共同研究会の代表である周俊と同副班長の石川が実際の音頭をとり、日本で刊行された代表的な中共 100 年史党史著作を国外の著名な中共党史研究者（楊奎松）らを招いて評定したもので、会場参加に限定した会であったにも関わらず、70 名を超える参加者を集めることができた。

7. 研究成果公表計画および今後の展開等

今後、研究会に出席した報告者はそれぞれ、自らの報告内容をさらに発展させ、単著論文を発表する予定がある。これらの個別の事例研究を統合し、現代中国における毛沢東時代の公安警察と暴力についての新たな分析枠組みを提示することが期待される。